

## 序

独法化して以来、旧国立大学は教育研究のほかに、地域（社会）貢献を果たす役割も新たに期待されることになった。宇都宮大学は地域貢献度 NO1 の評価を得たところであるが、「お米と果樹とミルクの不思議体験」、「オープンエコファーム」、「園芸技術講習会」など、いわゆる食育に関する当農場のこれまでの取り組みも、その一翼を担ってきたと自負している。

食育については、“農と食”を通じて豊かな人間性を育んでいくことの重要性が認識され、昨年、国レベルで食育基本法が制定され、全国大学附属農場協議会としても、「大学農場の教育・研究資源を活用した先導的食育プログラムの確立と普及」というプロジェクトテーマを掲げ、この推進に貢献しようとしているところである。こうした状況をふまえ、当農場の取り組みを一層ブラッシュアップしていく必要性を改めて痛感しているところである。

さて、当農場では今年、いくつか新たな取り組みにも挑戦した。宇都宮大学のグッツ開発を目指し、酒米（五百万石、栃木酒 14 号）を試作した。8 月には国際交流締結校農業実習事業として当農場の職員が韓国天蓮庵大学を初めて訪問し、学生の指導補助をした。大学祭に初めて参加し、シクラメンその他の花卉と野菜を販売、大好評をえた。農学部全学科の学生を対象とするコア実習も今年から始まった。また 9 月には、関東・甲信越地域大学農場協議会技術研修会を当農場が担当し、意義深い情報交換を行うことができた。

農場では、農学部の教職員を招いて行われる公式年中行事として、花見、さなぶり、収穫祭があるが、学長、理事、監事、学部長、本部役職者にも来場していただき、盛大に行われた。特に 11 月に行われた収穫祭では、前田教授が開発した稲品種「雄大」の美味しさを楽しむ一方、たまたま日本を訪問していた韓国天蓮庵大学の教授も飛び入り参加し旧交を温めるなど、大いに盛り上がった。

「農場報告」第 23 号は、資料 1 編と平成 17 年度の業務報告からなっている。業務報告は、農場に依拠した調査・研究の概要、農作業日誌、運営・記録などについて取り纏められたものである。当農場からの情報発信として受け止め、ご高覧をいただければ幸いである。

最後に、本報告の刊行に尽力された各位に感謝するとともに、当農場の教育・研究、運営、ならびに社会貢献のあり方について、ご助言とご協力を一層お願いする次第であります。

平成 18 年 11 月

農学部附属農場長 津谷 好人